

令和七年度 A日程入学試験問題

国語

2月2日(日)

— 注意事項 —

- 2 1 問題は1ページから29ページ、解答用紙は一枚である。  
次の指示にしたがうこと。
- 文学部（日本文学科・中国文学科・史学科）は**1・3・4**を解答すること。  
文学部（外国語文化学科・哲学科）、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、  
観光まちづくり学部は**1**が必須、**2・3・4**から一つを選択して解答すること。
- （解答する問題番号を、解答用紙のマーク欄にマークすること。選択問題を複数解答  
した場合は無効とする）
- 4 3 解答はすべて別紙解答用紙に記入すること。  
試験時間は六〇分である。

1 〔全学科の 必須〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 1 ～ 10 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 1 ～ 16 に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問八で40点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問十二で70点）

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

(1) あらかじめ申しあげれば、ぼくはこの現代世界がきらいではない。

不完全だが、それなりの正義や理知が滲透しんとうした。紛争も戦乱もいまだに十分にあるとしても、大量殺戮兵器さつりくによる残酷のかぎり尽くした二〇世紀を通過した現在、平和を希求する情念が、どういつても主流をなす。高度科学技術導入文明の恵みも、やはり輝かしい。紆余曲折うよよくせつあるにしろ、封建的迷妄を払い、それなりの理想や福祉や繁栄を実現しつつある時代であることは、素直に認めておこう。

だが、目に見えない根もとのところで、なにか大切なものが抜け落ちていような居心地の悪さを感じるのも、たしかだ。

「シルダの住民」というドイツ民話がある。シルダの町に住む人たちはみな聡明で、正義や友愛を理想として生きているのだが、しかしそうと気づかず全員で、——ナチ政権下の民衆の多くがそうであったように——じつは愚かな生活に明け暮れていたという、それは寓話ぐわである。

(a) 現代世界の住民もまた、そんなシルダの住民ではないか。明るく繁栄し、理知的にみえる現代世界全体の底がパッキリ口割れていて、ぼくたちは、じつは、とても愚かな営みに明け暮れているのではないか。そんな暗い疑念を、払い切れない。

じつにそのとおり。平和で清潔で豊かな生活の根底で、あたらしい形態の強制移住が、静かに進行している。そう、フランスの社会思想家、P・ヴェイリリオはいう。

こういうことである。

強権を発動し、権威を振りかざし、人や村落を強制移動する。強制執行法をつかって土地を取り上げたり、戦車や爆弾で恐喝しながら、強引にものや人を移動させる。そんな昔ながらの物理的強制移住もたしかに、民主主義システムが整備したはずの地上のどこにも、いまだにある。数百万人規模で、ついこのあいだも中近東地帯でおこった。

人やモノが、見えるかたちで移動するから、古典的強制移住はとても目につく。いかにも暴力的で傲慢な風景が目前にひろがるから、こころを逆(2)なでにする。だから話題になりやすい。政治問題として、明確に浮上もする。反対するにせよ、賛同するにせよ、じつにわかりやすい強制執行のかたちである。

だが、そんな物理的強制移住は、やはり局部的なこと。せいぜい数万人とか数百万人規模で、一地域に、一過的におこる。その意味で、〈異常〉事態であり、六六億人が住む地球規模でみると、特殊で例外的なケースといわなければならぬ。

だからゆるせ、無視せよというのではない。

問題は、目立つ強制移住ばかりに関心をむけ思いを吸い取られていると、地球規模で進行しているもつと怖ろしい強制移住が、見逃されてしまふ、ということである。物理的強制移住とはまったく別の仕方で起こっている、大がかりで新しい強制移住のことが、わからなくなる。現代では、権力との闘いの本筋は、「大権力」との闘いじゃなく「微視的権力」との闘いだという、周知の事実の事の深刻さが、すっかり忘れられてしまふのである。

古代や中世とはちがって、人権思想が流布した現代世界である。物理的強制移住はどういっても、やはりすくなくなつた。だがそれは、世界各国が「民主化」したからではない。人権思想が根づいて、明るい社会が到来したからでもない。

じつは、もうあまりその必要がなくなつたからだ。物理的強制移住にかわつて、ぼくたちの「生や生活の場所の強制移動」(ヴィリリオ)が行われるようになったからである。生存活動それ自体の強制移動(生権力の行使)が、静かに目にも見えない仕方で執行され、その目にも見えない強制執行こそが、現代という時代の本質をかたちづくっている。

目には見えない強制移住とは、今ここの現在を立て続けに篡奪(さんだつ)し、つねに〈いつかどこか〉へとぼくたちを追いやる強制移住のことである。ひらくくいえば、生活する場所がもう、今ここの局所的時空ではなくなつた、ということである。

たとえば、新聞紙面、TVやケータイやパソコンなどの情報機器が作りだすヴァーチャル情報世界。全国津々 I で、朝となく昼となく、意識の中核は、そこに想(おも)いを吸い取られて、日常生活が展開する。あるいは、成果追求競争のこの時代である。明日や来年の計画だとか先行きへの心慮や不安だとか、昨年の成果やその反省や悔恨だとか、後にくる時間や時代への予測や期待や責任などなど。〈今ここの〉ではない〈いつかどこか〉の観念や表象や感情が作りあげ、一大ヴァーチャル・ワールドのなかで生きるよう、いやでもいつのまにか強いられるしまつている。

ぼくたち現代人が生存する場所。意識をそこにかたむけたり、伎倆(ぎりょう)が工夫をこらしたり、成果を期待したり、計算したり、ものごとを配慮

したり加工している場所。だからぼくたちの生がそこにつなぎ止められている所。それはもう、基本的に今このリアルな現在時ではないということである。局在的でとりかえようもない「いま」や「ここ」ではなくなっている。ぼくたちはつねに、〈いつかどこか〉という超越的な場所、時間を消費し生きるよう強制移動させられている。今ここではない〈いつかどこか〉を第一的な関心の的とする超越的生活形式のなかで生きることが、つまり生(d)の純粹形をあえて生きないというエートスが、慣行になつていくということである。

当然、「身近な場所や身近な人たちと今ここで愉快地共に生きる生活形式」(イリイチ)は、すっかり価値をなくし、「僻地化(へきちか)」し、大半の人の人生の視野から省略されてしまった。それが、「新しい強制移住」である。

生存次元が二重化した。そういつていいかもしれない。生身が現に生きている生存の次元がある。今ここに生起するともリアルな、それはできごとだ。時々 Ⅱと変異し生滅する、まさにリアル・ワールド。そこでぼくたちは生まれ、いずれそこで死んでいく場所だから、生の純粹形が息吹くピュアな場所だといわなければなるまい。

だが現代生活は、そんなリアル・ワールドへの帰属を希薄にする。同期の仲間より少しでも早く昇進しようと、あれこれ上司に媚(こび)を売るサラリーマン。子供が塾や学校などで近所に負けないために、懸命に頑張る母親。少しでも他人を出し抜こうと、頻繁に車線を変更するドライバー達などなど。毎日、ぼくたちは知らないうちに、他人との勝負にいやでも参加してしまう。昇進や成長といった〈いつかどこか〉にまつわる

要素や次元が <sup>(3)</sup>輻輳(ふくそう)してつくりあげる遠隔なヴァーチャル・ワールドへ、感情も思考も願望も夢もすっかり没入してしまっている。「近さ」(ハ イデガー)としてのリアル・ワールドは、「遠さ」としてのヴァーチャル・ワールドへ換算され、<sup>(e)</sup>近さの世界それ自体がすっかり「立場」を失っている。

むろん、だれもわかつてはいない。企業のトップに昇りつめることができるのはほんの一握りだし、万事は実力や努力より運が決め手になることも。我が子は、優秀な学校でトップになつても、自分同様、この子が人生の真の意味に気づくわけでないことを。何台も追い抜いて爆走していったドライバーも結局、おなじ所で信号を待っていることも。

さらにわかっている。趣味に没頭したり、家族と一緒に過ごす、穏やかで静かな時間にこそ幸せがあることを。蕪雑(ぶざつ)な競争に人生を浪費している今も、公園では四季 Ⅲの花が咲き、真つ赤な大きな夕陽がゆつたりと海に落ちゆくことを。この瞬間にも、多くの幸せが、本当はぼくたちを待ちわびていることを。いずれ死に逝くさだめにあるのだから、他人との競争に参加している暇なんか、本当はないことも。

そんなことなら、十分に分かっているはずだ。でも分かっている、なにかに追い立てられるように、今この近さの世界を抹消し、遠くへ遥(はる)かへ向かつて競(は)つてしまう。

いつの時代もそうだったかもしれない。「明日を思いわずらうなかれ」。そんな教えが二千年前にもあったくらいだから、先行き不安は人類の友達。社会生活を営むとは、そもそもがそんなもの。そう言い放つことも可能ではある。

だがそうだととして、この時代は、明日を思いわずらう度合いが極端にすぎる、というより「この日」を亡失する瞬間抹消の度合いが激しすぎる。街角に佇めばわかる。ほとんどだれも、この時この場(f)にいないかのようだ。だから「表一情」がない。まるで亡霊か幽霊のようだ。

どうしてこんなことになるのか。当然、〈今ここ〉に佇んで生きること拒絶し、〈いつかどこか〉へ強制移住させている強力なパワーが、密かに働いているからである。

(古東哲明『瞬間を生きる哲学』)

問一 二重傍線部 (1)・(2)・(3) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 1 に、(2) は 2 に、(3) は 3 にマークしなさい。

- |   |   |   |
|---|---|---|
| <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">1</span> | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">2</span>                         | <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">3</span> |
| (1)<br>ア あえて<br>イ 念のため<br>ウ 元より<br>エ 前もって<br>オ かつて            | (2)<br>ア 不愉快にさせる<br>イ 激怒させる<br>ウ 逡巡 <small>しゆんじゆん</small> させる<br>エ 不安にさせる<br>オ 目覚めさせる | (3)<br>ア 対立<br>イ 合点<br>ウ 並行<br>エ 遭遇<br>オ 集中                   |

問二 傍線部 (a) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 4 にマークしなさい。

ア それなりの理想や福祉や繁栄を現実のものにした現代世界の人びとの原型となる存在として、ナチ政権下のドイツで、愚直に正義や友愛を理想として掲げて生きたシルダの住民に求めることができるように思われるから。

イ 封建的迷妄を脱して文明の恩恵に浴した現代世界に生きる人びとが、寓話として残りさえするドイツのシルダの住民たちを惑わせた愚かな理想主義を、未だ克服することができないでいるように感じられるから。

ウ 文明の恩恵や掛け声だけの平和主義思想によって、地域紛争やテロによる大量殺人の真実を看過させられている現代世界に生きる人びとが、ナチスの巧みなプロパガンダによって現実を見失ったシルダの住民の姿と重なるように感じられるから。

エ 人権思想と平和への希求が共有され、文明の恩恵も受けて繁栄を実現しつつある現代世界に生きる人びとが、みな正義や友愛を理想としながらそれと知らずに愚かな生活を送っていたシルダの住民同様の過ちを犯しているように思われるから。

オ 紆余曲折を経ながら高度な科学技術を導入して理想を実現しようとした現代世界の人びとの愚かさや、自らを聡明であると疑うことなしく偏った思想を理想として生きた民話にのこるシルダの住民と共通するように感じられるから。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 5 にマークしなさい。

ア 戦車や爆弾で脅して強引に行われる大権力による強制移動にばかり注目していると、微視的権力による大がかりで一過的な強制移住の重大さに気づくことができなくなってしまうということ。

イ 人やモノが見えるかたちで移動させられる局所的な物理的強制移住に目を奪われていると、世界規模で行われている新しい目に見えない強制移住に気づくことができなくなってしまうということ。

ウ 強制執行法を行使して実行される古典的強制移住だけに話題を絞ると、民主主義システムが整備された現代世界に特徴的な過去とは異なる物理的強制移動に気づくことができなくなってしまうということ。

エ 数百万人規模で局部的かつ一過的にしか行われえない物理的強制移住にこだわりすぎると、地球規模で行われている暴力的で傲慢な新しい強制移動の実態に気づくことができなくなってしまうということ。

オ 分かりやすい執行の形である古典的強制移住を特殊で例外的なケースだと認めると、新しい形の強制移動が行われつつあるという周知の事実気づくことができなくなってしまうということ。

問四 傍線部 (c) の理由として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 6 にマークしなさい。

ア 情報機器の氾濫が招く成果追求競争に昼夜を問わず意識の中枢を向けざるを得ないようにされてしまっているから。

イ 明日や来年といった不確実な時間への期待を不安に置き換えるように強制されてしまっているから。

ウ 本来存在すべき居場所からの強制的な移動を自らも気が付かないうちにさせられてしまっているから。

エ 世界のどこにあっても計画や予測といった未来の時間を消費し尽くすよう知らぬ間に仕向けられてしまっているから。

オ 情報世界や後にくる時代といった超越的な時空間への関心を第一として生きるよう強いられてしまっているから。

問五 傍線部 (d) の説明として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 7 にマークしなさい。

ア 微視的な権力によって未来や先行きへの不安をかきたてられ疲れ果ててしまい、身近な人と身近な場所で生を共にすることを意識して選り取る情熱に欠ける人が増えているということ。

イ 情報機器によって生み出された新しい生存の次元を、自らの生きる場所としなければならないという考えに多くの人がとらわれてしまっているということ。

ウ 物理的強制移動に取って代わった微視的権力による目に見えない強制執行を意識するあまり、生存の場所がヴァーチャルな僻地と化してしまっただけということ。

エ 実際に生きている局所的で交換不可能なリアルな世界を意図して生存の次元としないという行動の規範が、人びとの間で当たり前となっただけということ。

オ リアルな現在時ではない〈いつかどこか〉という概念が生じたことで、〈今ここ〉に意識の中枢を置き続けるという生の有り様が重要視されるようになったということ。

問六 傍線部(e)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 8 にマークしなさい。

- ア 身近な人びとと集う現実世界が、先行きへの期待や時代の予測といったヴァーチャルな世界に取って代わられているということ。
- イ 局在的で交換不可能な本来の生存の空間が、〈いつかどこか〉の観念や表象がもたらす世界へ吸収され無価値になったということ。
- ウ 人びとが本来帰属するはずだった〈今ここ〉という時空間が、現代世界の先行きへの不安が高じて顧みられなくなったということ。
- エ 生身が現に生きている生存の次元が、未来や明日といった今ではない超越的な世界から捉えられて意味をなくしたということ。
- オ 生の純粹形を生き得るピュアな場所が、競争社会の尺度から判断され僻地化して甚だしく価値を低下させてしまったということ。

問七 傍線部(f)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 9 にマークしなさい。

- ア ヴァーチャル世界の拡張によって人類がもともと抱えていた明日を思いわずらう歴史的な病が知らぬ間に高じ、純粹な生を生きることができなくなってしまっているから。
- イ 未来への不安を打ち消そうとして成長や成果への過度な期待をいただき、〈いつかどこか〉というヴァーチャルな未来へと逃避するようになってしまっているから。
- ウ 世界がヴァーチャルとリアルに分けられて存在が二重化し、じつくり趣味に没頭したり、ゆっくり家族と過ごしたりする時間をもつことが難しくなってしまっているから。
- エ 先行きを思い悩む度合いが極端に大きくなったことによって、〈今ここ〉という近さの世界の代わりに超越的な時空間に安らぎを求めようになっただけで、〈今ここ〉という近さの世界の代わりに超越的な時空間に安らぎを求めようになっただけで、〈今ここ〉を意識の中心において生きるよう微視的権力によって知らぬ間に強制され、〈今ここ〉のリアルな生を遠ざけてしまっているから。

問八 問題文の主旨として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 10 にマークしなさい。

ア 現代世界が紆余曲折を経ながら文明を進展させ理想の実現にむけて進んでいることは確かだが、「シルダの住民」の過ちを繰り返さない保証はない。実際、武力による物理的強制移住は今日でも局部的に行われており、一方では世界規模での新しい形態の強制移住が静かに進行しつつある。ことに後者は、文明化の結果としての情報機器の発達によって生じたヴァーチャル・ワールドに人びとが心を奪われることで引き起こされる。その世界では、先行きへの期待と不安に駆られあらゆる場面で競い合うことに夢中となり、人びとは本来いるべき〈今ここ〉というリアルな生の場所を忘れ去ってしまう。しかし、〈いつかどこか〉へと誘導する強力なパワーの存在を可視化することができないために、人びとはその状況を当たり前のこととして受け入れ、ただどこか釈然としない思いを抱えながら生きているのである。

イ 現代世界が理想や福祉や文明の繁栄を実現しつつあるのは確かだが、実はドイツ民話に出てくる聡明で正義や友愛を理想とした「シルダの住民」の寓話は今も機能する。理知的なはずの現代世界の住人は、進行している新しい形態の強制移住を受け入れてしまっている。人やモノが見えるかたちで移動する古典的強制移住には敏感に反応しながら、目に見えないかたちで行われる生存活動それ自体の強制移動は看過されている。〈いつかどこか〉という超越的な場所へ目を向けるよう強いられ、未来の成長や成果を追い求める生活形式に存在を没入させた人びとにとっては、〈今ここ〉が生存の次元の中心でなくなってしまう。むしろ競争のむなしさや〈今ここ〉での生活の重要性を人びとは忘却したわけではないが、自らを〈いつかどこか〉へ強制移住させる微視的権力から逃れることができないのである。

ウ 現代世界では平和の希求が主流となり科学と文明の繁栄によって封建的な迷妄から脱しているのは疑いのないことだが、ナチ政権下の「シルダの住民」と同じく愚かな生き方をしているのである。相変わらず世界の一部で起きている古典的な強制移住に対しては、情報機器の発展もあって人びとはその状況に厳しい目をむけるようになっていく。だが、自身の足元で起こっている変化は見過ごされがちで、微視的な権力の行使によって生の純粹形を放棄させられていることは不問に付され、人びとは知らず知らずのうちに成果の追求に明け暮れる生活にどっぷりと浸ってしまっている。その結果として〈今ここ〉から遠ざかっていることに、人びとは心のどこかで気が付いてはいるものの、競争から取り残される恐怖におびえるあまり、世界の本質的な変化を認めてきちんと対応することができないのである。

エ 現代世界が文明と科学の恩恵を受けて人権や平和を重要視するようになったことは疑い得ないが、ドイツ民話の「シルダの住民」よろ

しく愚かな生活を送っていることも否定できない。人びとが今日の権力の有り様を把握しそこない、強権を発動して権威を振りかざす大権力との闘いを中心に据えて、眼に見えない強制執行を行う微視的権力の存在を軽視したため、知らぬ間に〈いつかどこか〉というヴァーチャルな次元への依存が強まって身近でリアルな生の空間が遠隔へと追いやられてしまった。街にあって他者との競争に明け暮れる人びとは、まるで幽霊か亡霊のように表情を失い存在感が希薄になっているが、そうした人びとは、生の純粹形を保てる〈今ここ〉という本来の居場所がもはやどこにもないことを心のどこかで気づきながら、その状況に向き合うことができないのである。

オ 現代世界ではそれなりに正義や理知が機能し、文明の恩恵も受けて、人権への配慮も当たり前となっているのは言うまでもないことだが、「シルダの住民」が残した教訓は残念ながら今でも通用する。〈今ここ〉であるリアルな生の空間に加え、未来に属するヴァーチャル・ワールドの出現によって存在の二重化を余儀なくされた人びとは、意識の中枢は超越的な空間へと向かわせ、生身はたえず変異し生滅するリアルな世界に留め置かれている。未来への志向は人びとを成果追求の競争へと駆り立て、生身としての存在は身近な人びととの充実した時間を過ごすことを求める。この矛盾に耐えられない市井の人びとは、生きて在る世界を実感しようとして街をさまようが、いつの間にかそうした僻地へと自らを移動させるよう仕向けてきた微視的権力というものの本質を見抜くことができないのである。

**注意**

文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は、次のページに問題が続きま



問九 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

空欄   に入る言葉を、次のア～ケからそれぞれ一つずつ選び、 は解答欄  に、

は解答欄  に、 は解答欄  にマークしなさい。

ア 等々    イ 折々    ウ 散々    エ 刻々    オ 森々    カ 類々    キ 淡々    ク 浦々    ケ 便々

問十 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部 (X) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

ア 現代は、暴力的で傲慢な大権力によってよりも、それと気が付かれないうちに機能する微視的な権力によって人びとが強制的に動かされる時代だということ。

イ 現代は、物理的な強制移住という目立つ権力ではなく、正義や理想の名目で人びとの意識を意図する方向に向けさせる形で権力が行使される時代だということ。

ウ 現代は、古典的強制移住を行う大権力に注目させることで、目に見えない強制執行を取り仕切る新たな権力の存在をうやむやにする時代だということ。

エ 現代は、生や生活の場所の強制移動が完遂され、物理的な強制執行を可能にする大権力に代わって静かに人びとを導く微視的な権力に支配された時代だということ。

オ 現代は、人権思想が広くいきわたり古典的権力への監視が強化され、目に見えない形での権力の行使によって物理的強制移動を試みる時代だということ。

問十一 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

波線部(Y)の理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 15 にマークしなさい。

ア リアルな生身が生きる〈今ここ〉という存在の次元への帰属が希薄になり、局所的時空である〈いつかどこか〉へと常に意識を向けさせられてしまっているから。

イ 生の純粹形が見失われて本来の居場所が僻地と化し、リアルとヴァーチャルとの二つの次元に生きなければならなくなってしまっているから。

ウ 超越的な時空間である〈いつかどこか〉とリアルに生起し続ける〈今ここ〉とに生存の次元が分離し、身近な人と愉快に暮らす喜びが忘れ去られてしまっているから。

エ 〈いつかどこか〉を志向する情報社会にあつてリアルな先行きへの不安と期待とで想いを引き裂かれ、成果追求競争のむなしさに気が付かなくなってしまうから。

オ 〈今ここ〉とは異なるヴァーチャル・ワールドへ感情や思考が没入して、生が本来つなぎ止められているべきピュアな場所から遠ざかってしまっているから。

問十二 (文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部のみ解答すること)

問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つ選び、解答欄 16 に二つマークしなさい。

ア 先行きに不安を感じるのには理知的に見える現代世界の人びとが実は封建的迷妄から脱し切れていないからだ。

イ ヴァーチャル・ワールドの成立によって、リアル・ワールドの「遠さ」が明らかになった。

ウ 競争社会では、実力や努力よりも運が決め手となることに人びとは心の底で気が付いている。

エ 明日を思いわずらうかわりに、人びとは〈今ここ〉に佇み生きること拒絶するようになってしまっている。

オ 「シルダの住民」の寓話にはナチ政権下のドイツ国民への批判が込められている。

カ 古典的強制移住が減少した主な理由を、民主化と人権思想への理解の広まりに求めることはできない。

この問題は、解答欄 21 ～ 28 に解答すること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(30点)

テレビや映画では、物語は映像として自動的に進行していきます。それに対して、絵本はページを一枚一枚めくることによって、物語の時間進行していきます。小説や漫画でも同じではないかと考えるかもしれませんが、絵本ではページごとに場面の転換があり、小説や漫画のようなページをまたぐ物語の連続性より、ページごとの非連続性に特徴があります。このページごとの非連続性という絵本の特性が、積み木型絵本や入れ子型絵本のように、異なる登場人物の出現と、同じ台詞や同じ事柄を繰り返すという手法を生みだし、リズムをもった絵本作りを可能にしているのです。

また、積み木型絵本の積みあがっていく過程で、あるいは入れ子型絵本のなかに入っていく過程で、いろいろな動物たちが、同じような台詞、同じような行動パターンで、つぎつぎに登場し、どんどん増えて積みあがったり、あるいは入り込んだりする繰り返しされるプロセスは、文章にもイラストレーションにも独特のリズムを生みだす効果があります。反復でありながら、異なる場面を作るために、絵本作家は動物の体の大小や言葉の少しの変化を注意深く描き込みます。このように、絵本作家は、同一性と差異の反復によって、絵本特有のリズムを生みだそうとするのです。そのリズムは、単純な同一性の機械的な反復ではなく、生きた反復というべきリズムです。

そして、この繰り返しによる絵本独特のリズムは、子どもに楽しさと心地よさを感じさせます。しかも、同じ種類の動物が二度登場することはまずないので、ページをめくるたびに新たな動物と出会える喜びがあります。異なる動物たちがつぎつぎと現れ、どんどん増えていくのです。

(a) このような繰り返しによるリズムは、子どもに当然つぎの出会いの場面を予感させるようになります。ページをめくると、今度は何の動物がでてくるのだろうか。子どもはわくわくします。その絵本を一度読んだことのある子どもはどうでしょうか。子どもはつぎのページで「主人公」がどんな動物と出会うのかをすでに知っていますが、そのことがかえって今度は期待となり、動物たちの登場を待つ楽しみになります。ページをめくると、子どもの期待どおり、思い浮かべた動物たちにふたたびまた会えるわけです。

しかし、このつぎつぎと現れて、どんどんと増えていくというのは、そのつぎに起こるカタルストロフィーを準備するためのプロセスでもあり

ます。なんといつてもこのカラストロフィーの出現が、積み木型絵本と入れ子型絵本の最大の醍醐味<sup>(1)</sup>なのです。

それまで、つぎつぎと現れどんどんと積みあげてきたもの、あるいは入り込んできたものの集合体が臨界点にまで達した瞬間、とてつもない爆発とともに崩壊が生じます。それは、絵本のなかでも一番盛りあがるまさにクライマックスの場面であり、また絵本の比類のないおもしろさと心を躍動させる力をもっとも強く感じる場面でもあります。またそれは、つぎつぎと現れどんどんと増えていくという、それまで繰り返されてきたリズムが一転して、強烈な崩壊に変わる瞬間といってもよいでしょう。空間の構成でいえば、繰り返されることで一回ごとに積みあがり構成された空間秩序が、一転して異なった姿を見せることです。こうして世界はふたたび物語が開始されたところに立ち帰るのです。

『ガンピーさんのふなあそび』では、動物たちが不安定に揺れる小舟の上で大騒ぎを起こしたために小舟が転覆してしまう場面、『ぞうくんのさんぽ』では、カメラワニーカバールゾウのトーテムポールのような動物の塔が崩れる場面、『てぶくろ』では、おじいさんが手袋を探しに戻ったときに、なかにいた動物たちが手袋から逃げだす場面（この場面は直には描かれていませんが想像できるようになっていきます）、『へびのせんとせいとさるのかんごふさん』では、ゾウの大きなくしゃみによって、ゾウの鼻に引っかかっていた動物たちが飛び出る場面などに、その特徴をみるのができました。読み手のドキドキワクワクした緊張と予感とが頂点にまで高まり、臨界点に達した秩序が一気に崩壊する瞬間は、空間の構成に大きな質的転換を生じさせ、そのため実際の積み木遊びで体験されるのに類似した感覚を引き起こします。読者はこのような場面で、カラストロフィーとともに緊張が一気に解かれるめまいのようなカタルシスを感じるのです。

しかし、積み木型絵本や入れ子型絵本において描かれるカラストロフィーが、なぜ読者にカタルシスや喜びをもたらすのでしょうか。このような体験とは何かということ、考えてみたいと思います。

遊びに夢中になって我を忘れているとき、優れた文学・芸術作品に接したとき、また自然の風景に溶け込むとき、あるいは、死や性といったおぞましいものやエロティシズムに接したとき、日常の禁止は侵犯され、自己と自己をとりかこむ世界とのあいだの境界線が消える体験をすることがあります。「体験」とは、このような自己と世界とを隔てる境界が溶解してしまう<sup>(2)</sup>、陶酔の瞬間や脱自的な恍惚<sup>こうごう</sup>の瞬間そしてめまいの瞬間を指す言葉です。

ところで、「経験」の場合では、「私の経験」といった表現で「私」の所有物であるかのように取り扱うことができるのにたいして、「体験」の場合では、体験のさなかに自己が溶解してしまうために、「私の体験」というように、「私」によって所有することも、対象としてとらえることもできません。「私」はすっかり体験のうちに呑み込まれているのです。

経験の場合では、経験は能力の発達をもたらす客観的に観察することもできませんし、経験者がそのプロセスを一貫した筋をもった物語として

明確に他者に向けて表現することもできます。ところが、体験では主体が体験のうちに溶解してしまうため、客体との距離がなくなり、明晰で一義的な言葉によって筋道のある物語として体験を言い表すことができないのです。

我を忘れたり、驚嘆したり深く感動したときには言葉を失ってしまい、「おお！」とか「ああ！」といった言葉以前の声でしか言い表すことができないものです。積み木の崩れる瞬間には、この「おお！」「ああ！」が発せられるのだということはわかりでしょう。

このように溶解というべき体験を、言葉でもってとらえようとしたときの困難さは、相対的なものではありません。その意味で、「体験」は「経験」のように自己のなかに意味として取りこんで、自己を豊かにしてゆくものではありません。しかし、意味として定着できないところに、生成としての体験の価値があるのです。

私たちは溶解を体験することによって、自分を超えた生命と出会い、有用性の秩序とは別の次元で、自己の根底に深く触れることができます。労働のように未来のためではなく、生き生きとした現在に生きていることを、深く感じることもできるのです。そして、なにより子どもが深く没頭して生きている「子どもの時間」は、このような体験によって支えられているのです。子どもは、まさに「遊びたいから遊ぶ！」なのです。

このように体験と経験とを分けたとき、崩壊の描かれた積み木型絵本と入れ子型絵本が、主人公の経験を描いたものでないことはすぐにわかるでしょう。それでは積み木型絵本や入れ子型絵本は、体験を描いたものといったらよいでしょうか。もちろんそうですが、絵本のなかにめまいの体験を描くということは、たんに体験を再現するにとどまらず、その体験を読者に引き起こすことにもなるのです。

自ら欲して積み木を壊すのではなく、高く積みあがった積み木がバランスを失い自壊するときにさえも、驚きと同時に、<sup>(4)</sup> いわゆる「わくわく」がたい喜びが生じるものです。秩序だったものが一瞬のうちに無に帰する姿は、何か大きな感動を引き起こします。そして、絵本のなかの高く積みあがった動物の塔が、一瞬のうちに崩れるのを見るときの読者の驚きと喜びも、これと同じものなのです。<sup>(c)</sup> ここには溶解というべき体験が生じているのです。

(矢野智司氏・佐々木美砂『絵本のなかの動物はなぜ一列に歩いているのか』)

問一 二重傍線部 (1)～(4) の意味として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(1) は解答欄 21 に、(2) は 22 に、(3) は 23 に、(4) は 24 にマークしなさい。

(1) 21

ア	素朴で単純なおかしみ
イ	気の利いた繊細な味わい
ウ	この上なく巧みな趣
エ	ものごとの本当のおもしろさ
オ	俗を離れた高尚な風情

(2) 22

ア	優れた物事に接して感動すること
イ	意識がなくなるほど酔うこと
ウ	身にしみて感じ入ること
エ	うっとりしてその気分にひたること
オ	胸が躍り心がわくわくすること

(3) 23

ア	その場にふさわしいさま
イ	最も重要で本質的なさま
ウ	まず初めに取り上げるさま
エ	ほんのわずかであるさま
オ	他に解釈の余地のないさま

(4) 24

ア	言ってもわからない
イ	理由を言いにくい
ウ	口には出しづらい
エ	言う必要がない
オ	簡単に説明できない

問二 傍線部 (a) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 25 にマークしなさい。

ア 異なる動物たちがつぎつぎと積みあがったりどんどん入り込んだりするという繰り返しにより、子どもの喜ぶ生きた反復があるということ。

イ ページをめくることにより場面が転換するので、新しいページごとに繰り返し新たな動物と出会えるというわくわくする反復があるということ。

ウ ページごとの非連続性があるので異なる動物が繰り返し登場するが、同じような出来事や同じような台詞という同一性のある反復があるということ。

エ 場面ごとに繰り返されるプロセスには同一性があるが、イラストレーションや台詞などの言葉には変化があり、差異を含んだ反復があるということ。

オ 繰り返し読まれることにより、次の場面で登場する動物を知っているという楽しみがもたらされ、期待が裏切られない反復があるということ。

問三 傍線部 (b) の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 26 にマークしなさい。

ア 場面ごとに魅力的な動物たちがつぎつぎと現れどんどん増えていき、危うい均衡の中で全ての動物たちが集合しているとき、最も強く解放感への期待を抱くこと。

イ ページをめくる度に動物たちが積みあがったり入り込んだりして増えていき、緊張と予感が高まっていった最後に、転覆や脱出といった一瞬の転換とともに解放感を感じることに。

ウ ページをめくると予想通りに動物たちが新たに登場し、微妙なバランスの中で積みあがったり入り込んだりする途中で、崩壊や爆発への予感とともに解放感を期待できることに。

エ 一つずつ積み木を積みあげる遊びに没頭し、最後の崩れる一瞬に解放感を感じるように、絵本の最後のページを閉じる瞬間に全てが終わったという解放感を感じることに。

オ 場面ごとに動物たちが一つずつ増え続けて空間秩序が整ってきたときに、突然、質的転換が生じ全く異なる場面になり、これ以上ない驚きと解放感を感じることに。

問四 傍線部(c)の説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 27 にマークしなさい。

ア 絵本を読むことに夢中になり主人公とともに生きるのは、読者であるにもかかわらず、絵本世界と現実世界とが混じり合う中で自分を超えた生命と出会うような体験をしているということ。

イ 絵本や積み木に没頭し、言葉を失うほどの感動を覚えるのは、連続と非連続との繰り返しを経てに強烈な崩壊の瞬間に直面し、おぞましさをエロティシズムに通じるカタルシスを経験しているということ。

ウ 未来のための有用性などは別の次元で生き生きと現在を生きるのは、「遊びたいから遊ぶ！」ことに熱中し、一瞬のうちに無に帰する爆発に直面しカタルシスを体験しているということ。

エ 積み木型や入れ子型の絵本を読み、カタルシスや喜びを感じるのは、遊びの世界に没頭し、爆発の起こる瞬間に自己と自己をとりかかむ世界とのあいだの境界線が消える体験をしているということ。

オ 動物たちが崩れ落ち元に戻る絵本を子どもが読むのは、秩序だった空間構成が突然崩壊する場面でめまいを感じ、空想との境目がわからなくなる経験をしているということ。

問五 問題文の内容としてふさわしいものを、次のア～カの中から二つを選び、解答欄 28 に二つマークしなさい。

ア 子どもにとって絵本を読むことに魅力があるのは、何度も同じ本を繰り返して読むことにより既知の登場人物に再び会う喜びを感じるからであると述べている。

イ テレビ・映画などの映像の特徴や、小説・漫画などの物語の特徴を述べながら、ページをめくる子どもの行為がもたらすリズムの心地よさを述べている。

ウ 「経験」はできごとを言葉で整理し、自己を成長させるものであるが、「体験」は自己と世界との境がなくなり、言葉を失わせるものであると述べている。

エ 絵本の展開が同じパターンでも、言葉や動物たちの大きさや姿のわずかな書き分けがあり、子どもにはその違いを一つずつ発見する喜びがあると述べている。

オ 積み木遊びと積み木型・入れ子型の絵本との共通する楽しさは、積み木や絵本の動物たちがどんどん増えていく、永遠の繰り返しにあると述べている。

カ 絵本による我を忘れるような体験は、今を生き生きと生きていることを感じさせ、恍惚となるような瞬間を読み手につくり出すことにもなると述べている。

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は 必須〕。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は 〔選択〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 41 ～ 60 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 41 ～ 57 に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問十二で40点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問九で30点）

次の文章は、『源氏物語』の一節で、正妻を亡くした男君が、新年の参賀に回ったあと、亡妻の実家（大殿）を訪れる場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

朔日ついたちのひは、例の、院に参りたまひてぞ、内裏うち、春宮とうきゅうなどにも参りたまふ。それより大殿おほどのにまかでたまへり。大臣おとど、新しき年とも言はず、昔の御事ごことども聞こえ出いでたまひて、さうざうしく悲しと思すおもに、いとど、かくさへ渡り(1) たまへるにつけて、念じ返したまへどたへがたう(2) 思したり。御年の加はる故けに(一)、や、ものものしき気さへ添けひたまひて、ありしよりけにきよらに見えたまふ。立ち出でて御方かたに入りたまへれば、人々もめづらしう見(3) たてまつりて忍びあへず。若君見たてまつりたまへば、こよなうおよすけて、笑ひがちに(b) おはするもあはれなり。まみ、口つき、ただ春宮の御同じさまなれば、人もこそ見たてまつり(c) とがむれと見たまふ。御しつらひなども変はらず、御衣掛みぞかけの御装束みせつぐなど、例のやうにし懸かけられたるに、女(三)の(三)が並(三)ばぬ(三)こそはえなく(c) さうざうしけれ。

宮みやの御消息ごうせきにて、「今日はいみじく、思(d)ひたまへ忍ぶるを、かく渡(x)らせたまへるになむ、なかなか」など、聞(4)こえたまひて、「昔(e)にならひはべり(四)にける御装よそひも、月(f)ごろはいとど涙(f)に霧(f)りふたがりて、色(f)あひなく御覧(f)ぜられはべらむと思ひたまふれど、今日(f)ばかりはなほ、やつれさせたまへ」とて、いみじくし(f)尽(f)くしたまへるものども、また重ねて奉(y)れたまへり。かならず今日奉るべきと思しける御下襲したかきねは、色も織りざまも世の常ならず心(f)ことなるを、かひなくやはとて着(y)かへたまふ。来(y)ざらましかば口惜くちせしう思(y)さましと心(y)苦し。御返りには、「春や来ぬるともまづ御覧(y)ぜられになむ参りはべりつれど、思ひたまへ出でらること多くて、え聞こえさせはべらず。

あまた年今日あらためし色(五)ごろもきては涙(五)ぞふる心地する  
えこそ思ひたまへしづめね」と聞こえたまへり。御返り、

新しき年ともいはずふるものはふりぬる人の涙なりけり  
(2) おろかなるべきことにぞあらぬや。

(注) ○院―男君の父。 ○内裏―男君の兄。 ○春宮―世間に隠しているが、男君の実子。 ○大臣―男君の亡妻の父。

○昔の御事ども聞こえ出でたまひて―亡き姫君のことを、大臣が自分の妻(亡き姫君の母)に申し上げなさって。

○若君―男君とその亡妻との間に生まれた男児。 ○宮―大臣の妻で、亡き姫君の母。

○春や来ぬるともまづ御覧せられになむ参りはべりつれど―私にも春が来たかともまずは御覧になっていたかのために参上しました。  
たが。

問一 二重傍線部(1)～(4)の敬意の対象の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 41 にマークしなさい。

- |   |        |        |        |        |
|---|--------|--------|--------|--------|
| ア | (1) 大臣 | (2) 男君 | (3) 人々 | (4) 男君 |
| イ | (1) 男君 | (2) 大臣 | (3) 人々 | (4) 男君 |
| ウ | (1) 男君 | (2) 大臣 | (3) 男君 | (4) 男君 |
| エ | (1) 男君 | (2) 大臣 | (3) 男君 | (4) 宮  |
| オ | (1) 男君 | (2) 男君 | (3) 大臣 | (4) 宮  |

問二 傍線部(a)はどういうことか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 42 にマークしなさい。

- ア 男君に、遠慮する態度までも加わった、ということ  
イ 男君に、重々しい風格までも加わった、ということ  
ウ 大臣に、大袈裟な感じまでも加わった、ということ  
エ 大臣に、華やかな気品までも加わった、ということ  
オ 大臣に、風雅な雰囲気までも加わった、ということ

問三 傍線部 (b)・(c) の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、(b) は解答欄 43 に、(c) は 44 にマークしなさい。

(b)

43	ア	とてもうちとけて
	イ	すっかり大きくなって
	ウ	非常に嬉しそうにして
	エ	この上なく美しくなって
	オ	たいそう弱々しくなって

(c)

44	ア	仰々しい
	イ	心が痛む
	ウ	残念である
	エ	気の毒である
	オ	もの足りない

問四 傍線部 (d) の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 45 にマークしなさい。

- ア 私(宮) は悲しみを懸命にこらえておりますが
- イ 私(宮) はまったく人前に出ないつもりでございましたが
- ウ 私(宮) はあなた(男君)のことをひどく心配してございましたが
- エ あなた(男君) は悲しみを懸命にこらえていらっしやりながらも
- オ あなた(男君) はここに来ることをずいぶん遠慮していらっしやるが

問五 傍線部 (e) は、どのような気持ちから発言されたものか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 46 にマークしなさい。

- ア 華美な男君の衣装をたしなめる気持ち
- イ 意気消沈している男君をいたわる気持ち
- ウ 男君のために用意した衣装を卑下する気持ち
- エ 粗末な衣装を着ている男君を申し訳なく思う気持ち
- オ 男君がもっと亡妻のことを真剣に悲しんでほしいという気持ち

問六 傍線部 (f) について、男君はどのような気持ちで「着かへ」たのか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 47 にマークしなさい。

- ア ここに来た甲斐かひがあったと喜ぶ気持ち
- イ 宮の好意を無にしたくないという気持ち
- ウ こんな衣装では来た甲斐がないと残念に思う気持ち
- エ 妻がいないのに着がえても甲斐がないと落胆する気持ち
- オ 亡き妻の作った衣装はもう着ることができないと悲しむ気持ち

問七 本文中のいずれかの和歌についての説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 48 にマークしなさい。

- ア 男君は、新年といっても相変わらず降るのは、亡き妻の涙なのだったと詠んだ。
- イ 男君は、今ここで着がえをすると、亡き妻のことが思われて泣けてくると詠んだ。
- ウ 男君は、毎年ここで衣装を着がえることができるのは涙がこぼれるほど嬉しいと詠んだ。
- エ 宮は、着がえをした男君を見ると、男君の今後のことが思われて涙がこぼれると詠んだ。
- オ 宮は、新年といっても相変わらず降るのは、きっと亡き娘の涙なのだったと詠んだ。

問八 点線部の助動詞(一)・(三)・(四)の意味としてふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、(一)は解答欄 **49** に、(三)は **50** に、(四)は **51** にマークしなさい。

ア 打消    イ 可能    ウ 完了    エ 推量    オ 断定

問九 点線部の動詞(二)「おはする」・(五)「しづめ」の、

1 活用の行    2 活用の種類    3 活用形

は何か。該当するものを、次のア～カの中からそれぞれ一つずつ選び、(二)の1は解答欄 **52** に、2は **53** に、3は **54** に、(五)の1は **55** に、2は **56** に、3は **57** にマークしなさい。

1	ア	ア行	イ	イサ行	ウ	ウダ行	エ	エハ行	オ	オマ行	カ	カラ行
2	ア	四段活用	イ	上一段活用	ウ	上二段活用	エ	下一段活用	オ	下二段活用	カ	変格活用
3	ア	未然形	イ	連用形	ウ	終止形	エ	連体形	オ	已然形	カ	命令形

**注意** 文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問十 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (X) の下に補われる表現として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

- ア さうざうしく思ひたまふる。
- イ たへがたう思ひたまふる。
- ウ きよらに思ひたまふる。
- エ めづらしう思ひたまふる。
- オ はえなく思ひたまふる。

問十一 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Y) はどういうことか。最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

- ア 男君がここに来なかったら、宮は残念だったろうに、ということ
- イ 男君がここに来なかったら、男君は残念だったろうに、ということ
- ウ 宮がここに来なかったら、宮は残念だったろうに、ということ
- エ 宮がここに来なかったら、男君は残念だったろうに、ということ
- オ 宮がここに来なかったら、大臣は残念だったろうに、ということ

問十二 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

波線部 (Z) の説明として最もふさわしいものを、次の A～オの中から一つ選び、解答欄  にマークしなさい。

- ア この世は無常なものだという、語り手の感想
- イ 男君の行動は賢明なものだったという、語り手の評価
- ウ 贈答歌の出来は今一つであるという、語り手の言いわけ
- エ 男君も宮もたいへんな悲しみようであるという、語り手の批評
- オ 大臣邸の男君へのもてなしは愚かなことだったという、語り手の批判

〔文学部日本文学科・中国文学科・史学科は 必須〕。文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は 選択〕

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は解答欄 61 ～ 69 に、文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は解答欄 61 ～ 68 に解答すること。

（文学部日本文学科・中国文学科・史学科は問一～問七で 20 点）

（文学部外国語文化学科・哲学科、神道文化学部、法学部、経済学部、人間開発学部、観光まちづくり学部は問一～問六で 30 点）

次の文章は、越王の臣下であった范蠡が息子とともに越を去った後のことについて述べたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

范蠡浮海出齐，变姓名，自谓鴟夷子皮，耕于海畔，苦  
 身戮力，父子治产。居无几何，致产数十万。齐人闻其贤，  
 以为相。范蠡喟然叹曰：「居家则致千金，居官则至卿相，  
 此布衣之极也。久受尊名，不祥。乃归相印，尽散其财，以  
 分与知友乡党，而怀其重宝，间行以去，止于陶，以为此  
 天下之中，交一易有，无之路通，为生可以致富矣。於是自

謂<sup>フ</sup> 陶<sup>ニ</sup> 朱<sup>ト</sup> 公<sup>ト</sup> 復<sup>タ</sup> 約<sup>シ</sup> 要<sup>シ</sup> 父<sup>ニ</sup> 子<sup>ト</sup> 耕<sup>シ</sup> 畜<sup>シ</sup> 廢<sup>シ</sup> 居<sup>シ</sup> 候<sup>ウ</sup> 時<sup>ヲ</sup> 轉<sup>ジ</sup> 物<sup>ヲ</sup> 遂<sup>フ</sup> 什<sup>ニ</sup> 一<sup>ノ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 利<sup>ヲ</sup> 居<sup>ル</sup> 無<sup>ク</sup> 何<sup>イ</sup> 則<sup>チ</sup> 致<sup>シ</sup> 貲<sup>シ</sup> 累<sup>カ</sup> 巨<sup>カ</sup> 万<sup>ヲ</sup> 天<sup>ノ</sup> 下<sup>ヲ</sup> 称<sup>ス</sup> 陶<sup>ニ</sup> 朱<sup>ト</sup> 公<sup>ト</sup>

（『史記』）

（注）○齊—国の名。 ○海畔—海辺。 ○戮力—力を合わせる。 ○喟然—ため息をつくさま。 ○卿相—王を補佐する大臣。

○布衣—庶民、平民のこと。 ○相印—大臣の職位を示すはんこ。 ○知友郷党—知人友人や地域の人。

○間行—人目を避けて行く。 ○陶—地名。 ○生—生業。 生計。 ○約要—取り決めをする。

○廢居—貯えておき、値が上がったら売る。 ○什—十分の一。 ○貲—財貨。

問一 波線部 (X) (Z) の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中からそれぞれ一つずつ選び、(X) は解答欄 61 に、(Y) は 62 に、(Z) は 63 にマークしなさい。

<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: 30px; margin: 0 auto;">61</div> <p>(X) 自</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: 30px; margin: 0 auto;">62</div> <p>(Y) 以為</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; width: 30px; margin: 0 auto;">63</div> <p>(Z) 於是</p>
ア よりて イ みづから ウ てづから エ はなはだ オ しきりに	ア いはゆる イ おもむろに ウ いふならく エ おもへらく オ すべからく	ア これをもつて イ ぜにおいて ウ ぜをもつて エ これにおいて オ ここにおいて

問二 傍線部 (a) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 64 にマークしなさい。

- ア 親子で身を粉にして力を合わせて働いて、不正な産業を退けた。
- イ 親子で身を粉にして力を合わせて働いて、財産を作った。
- ウ 親子で人々に痛めつけられながらも力を合わせ、生計を立てた。
- エ 親子で人々に痛めつけられながらも力を合わせ、親子の関係を維持した。
- オ 親子で人々に痛めつけられながらも力を合わせ、新たな産業を作った。

問三 傍線部 (b) の解釈として最もふさわしいものを、次の ア～オ の中から一つ選び、解答欄 65 にマークしなさい。

- ア 家になれば千金を貸し出し、官位につけば卿相に知られる。
- イ 家になれば千金がたまり、官位につけば卿相になる。
- ウ 家になれば千金を支払い、官位につけば卿相に仕える。
- エ 家になれば千金が支給され、官位につけば卿相が訪れる。
- オ 家になれば千金を管理し、官位につけば卿相の世話をする。

問四 傍線部(c)に関して、斉を去った理由として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **66** にマークしなさい。

- ア 財産があるのに加え、長いあいだ高い地位についているのはかえって不吉だから。
- イ 自分には平民の暮らしが合っており、富や名誉は必要ないから。
- ウ 斉の人に賢者と思われたが、大臣にはしてくれなかったから。
- エ 斉の人に大事な宝を盗まれて、これ以上貧しくなりたくなかったから。
- オ 交易の中心地である陶に行って蓄財し、斉の人々に恩返しをしたかったから。

問五 傍線部(d)の書き下し文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **67** にマークしなさい。

- ア 生以て富を為して致すべしと
- イ 生を為して以て富を致すべしと
- ウ 生のために致すべくして以て富めりと
- エ 富を致すべくを以て生を為せりと
- オ 生を為して富みて以て致すべけん

問六 本文の内容として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、解答欄 **68** にマークしなさい。

- ア 范蠡は、行く先々で大臣となり、地域経済の発展に尽くした。
- イ 范蠡は、自分では働かず財を成し、人のために散財することを好んだ。
- ウ 范蠡は、斉でも陶でも成功をおさめ、親子で巨万の富を築いた。
- エ 范蠡は、農業や畜産の方法を人びとに教えたため、陶朱公と称えられた。
- オ 范蠡は、人に騙されて財産を失うことを恐れ、たびたび居場所を変えた。

**注意**

文学部日本文学科・中国文学科・史学科は、次のページに問題が続きます。



問七 (文学部日本文学科・中国文学科・史学科のみ解答すること)

二重傍線部の解釈として最もふさわしいものを次のア～オの中から一つ選び、解答欄 

69
----

 にマークしなさい。

- ア 季節ごとに耕作と畜産を交互に行う。
- イ 季節ごとに景観のよいところに移動する。
- ウ 季節ごとに生産する作物を変える。
- エ 時機を見計らって不要なものを手放す。
- オ 時機を見計らって高価になる物を売る。